第４章　チャーチ委員会による暴露、残虐極まりないチリのクーデター

上院議員フランク・チャーチ
「チャーチ委員会」は、CIA の「南米における軍事独裁政権の育成、その残虐行為」を暴露した

1

最初の計画では、ＣＩＡによるチリの軍事クーデターを書き、その次にアフガンでのイスラム原理主義集団を使った政権転覆、そして次の戦術としての「色と花の革命」いわゆる「カラー革命」について書くつもりでした。

しかしイスラエルによるガザ攻撃があまりにも残酷なので、それについてもふれないわけにはいかなくなり、「大イスラエル構想」や「ベングリオン運河計画」について書いているうちに、つい横道に逸れてしまいました。

そこでここからは「カラー革命」について書く予定です。

2

先述のとおり、アメリカが政権転覆をしたいとき、従来は、その相手国の軍隊にクーデターを起こさせることがＣＩＡの常套手段でした。その典型例がチリのピノチェト将軍による一九七三年の「9・11事件」でした。

それは民主的に選ばれたアジェンデ大統領を殺し、軍事クーデターを成功させました。

このチリ「9・11事件」を契機に、次々と南米全体にクーデターが広がり、そのクーデターに抵抗する民衆への弾圧・拷問・殺人があまりにも非道（ひど）いので、先述したように、アメリカでも「チャーチ委員会」が組織され、その実態の一部が暴露されました。

そこで世界の世論がＣＩＡに厳しい目を向けるようになり、アメリカも戦術を変えざるを得なくなりました。その結果、ＣＩＡが裏に隠れ、「民衆革命」というかたちで政権転覆を謀（はか）るようになりました。

それが「色と花の革命」いわゆる「カラー革命」でした。この典型がグルジア（現ジョージア）の「バラ革命二〇〇三」、ウクライナの「オレンジ革命二〇〇四」、キルギスタンの「チューリップ革命二〇〇五」です。

3

しかしこれまでの章では、アメリカによる軍事クーデターがいかに残虐なものであったかは、その先鞭をつけたチリを例に説明しただけでした。

しかもイスラエルによるガザ殲滅作戦で話が少し横道に逸れたので、その残略ぶりが読者の皆さんの記憶から少し薄れているかも知れません。

そこで、その復習を兼ねて、ナオミ・クライン『ショック・ドクトリン』から、もう少し引用したいと思います。それだけクライン女史の説明は、紹介しきれないほど詳細で、かつ生々しいからです。

次の引用は、チリから飛び火したアルゼンチンとウルグアイのクーデター、その軍事政権による弾圧・拷問・殺人のようすです（前掲書126頁）。

――――

市民に伝わる恐怖は連行の時点だけにとどまらない。捕らえられた者はアルゼンチン国内３００カ所を超える強制収容所に連行される。

収容所は、人口の密集した住宅地にあるものも少なくなく、なかでも悪名高いのはブエノスアイレスの目抜き通りに面した元スポーツクラブの建物や南部の都市バイアプランカの中心部にある学校の校舎、そして実際に使われている病院の一部などだった。

これらの強制収容所では早朝や深夜、軍用車がスピードを上げて出入りしたり、建物の中から悲鳴が聞こえたり、人の形をした奇妙な荷物が運び込まれたり、運び出されたり、といったことが近隣の住民によって沈黙のうちに見聞きされていた。

ウルグアイの軍事政権の鉄面皮ぶりもアルゼンチンと似たりよったりだった。同国の主要な強制収容所のひとつは、かって散歩やピクニックを楽しむ家族連れで賑わった首都モンテビデオの海岸沿いの遊歩道に隣接した海軍の兵舎に設置された。人々は悲鳴を耳にするのを嫌い、独裁政権の間、風光明媚なこの一帯からはすっかり人気（ひとけ）が途絶えた。

アルゼンチンの軍事政権は、殺害後の遺体処理にきわめてずさんだった。田園地帯を散歩していて、ろくに土をかぶせていない集団墓地に行き当たったり、公共のゴミ捨て場から遺体や指、歯などが見つかったり（今日のイラクでは同様の事態が起きている）、ラプラタ川の川岸に遺体が打ち上げられたりした。

遺体が空中から投げ捨てられたあとなどには一度に5、6体打ち上げられることもあったし、ヘリコプターから農家の畑に遺体が雨あられと降り注ぐことさえあった。

4

以上の例は、アルゼンチンやウルグアイの国内における弾圧ぶりですが、多くの抵抗する市民は弾圧を逃れて国外脱出を試みるひとも少なくありませんでした。

しかし南米全土に広がった軍事独裁政権は、お互いに連携し合って、このような抵抗する勢力の徹底的な弾圧を図ったのでした。この有名な「コンドル作戦」について、クライン女史は次のように説明しています。（前掲書127頁）

反体制活動家はしばしば近隣諸国に逃げ込むことがあったため、この地域の軍事政権は互いに協力して、悪名高い「コンドル作戦」を展開した。

この作戦のもと、南米南部地域の国々の情報機関は、アメリカ政府から提供された最先端のコンピューターシステムを使って「危険分子」に関する情報を共有し、国境を越えて誘拐や拷問を実行できるよう、相互の工作員を安全に通過させた。

これは今日のＣＩＡの「特例拘置引き渡し」と不気味なほど類似したシステムである。

各国の軍事政権は、捕らえた者から情報を引き出すのにもっとも効果的な方法についても情報を交換した。

クーデター直後にチリ・スタジアムに連行され拷問を受けた複数のチリ人は、拷問室にブラジル人兵士がいて、もっとも科学的な苦痛の与え方について助言していたという、予期せぬ事実について証言している。

この作戦について、前掲書は次のような「訳注」も付け加えています。

「コンドル作戦」はヒトラーの「夜と霧作戦」をモデルにしたものだった。一九四一年、ヒトラーはナチ占領下の国々におけるレジスタンス活動家をドイツに連行し、「闇と霧に紛れて一夜のうちに消せ」と命令した。

何人かのナチスの元高官が戦後チリとアルゼンチンに亡命しており、彼らが南米南部地域の情報機関にそのノウハウを教えたのではないかとの推測もある。

5

ナチスドイツが崩壊したとき、アメリカが少なからぬナチス幹部を北米や南米に脱出する手助けをしたことはよく知られた事実です。

いわゆる「ブラッドストーン作戦」「ペーパークリップ作戦」で、そのルートが「ラットライン」と言われるものでした。

私が自主教材『世界人権宣言』をつくり、「映像と音楽で学ぶ平和・人権・環境」という授業をしたとき、スティングの「They Dance Alone 孤独なるダンス」という曲を使ったことは、以前の章で紹介しました（詳しくは拙著『国際理解の歩き方』第4章を参照）。

が、そのとき調べていたら、ピノチェト政権下で拷問の手助けをしていたのが、ドイツを逃れたナチス幹部だったことを知り、驚きました。

考えてみれば、旧満州国の奥地で生体実験をしていた有名な「７３１部隊」の幹部も、生物化学兵器の資料をアメリカに提供することと引き換えに、戦犯裁判を免れ、その資料を元にアメリカの生物兵器研究所がスタートしているのですから、何ら驚くべきことではなかったのかも知れません。

最近（二〇二三年九月二六日）カナダ議会の下院で、ウクライナのゼレンスキー大統領が演説した際、第２次大戦中にユダヤ人大量虐殺に関わったナチス・ドイツの元関係者が紹介され、そのさい議員全員が起立して拍手をおくるという恥知らずな事件がありました。

この男性ヤロスラフ・フンカ氏は、元はナチス第14ＳＳ武装擲弾兵師団に所属していて、ポーランドとユダヤ系の民間人を殺戮していたにもかかわらず、ロタ下院議長は、彼を「英雄」と称賛したというのですから、呆れてしまいます。

その結果、ロタ下院議長が辞任することになったわけですが、これもアメリカがナチスドイツを匿って逃亡を援助してきた過去が、思わず露呈することになった一幕と言えます。

6

それはともかく、ＣＩＡの工作で実現した南米各地の軍事独裁政権は、このようにお互いに協力し合いながら「コンドル作戦」を遂行したのです。

が、彼らは単に情報交換しながら抵抗する市民の弾圧・拷問・殺人をおこなっただけでなく、その拷問技術の伝授もおこなっていました。

前掲書『ショック・ドクトリン』（127-128頁）は、この詳しい実態を次のように生々しく伝えています。ここでもＣＩＡはその悪魔的能力を遺憾なく発揮しています。

この時期、軍事政権間にこうした協力が行なわれる機会は無数にあり、そのなかにはＣＩＡが関与していたものも少なくなかった。

一九七五年、チリへのアメリカの介入について調査していた米上院委員会は、ＣＩＡがチリ国軍に対して「破壊活動を制圧する一方法に関する訓練を提供していた」ことを突きとめた。ブラジルやウルグアイの警察にアメリカが尋問技術を伝授していたことにも、多くの裏づけがある。

一九八五年に出版されたブラジルの「真実和解委員会」報告書『２度とくり返すな』に引用されている法廷証言によれば、軍の将校たちが軍事警察で開かれた「拷問クラス」に参加し、さまざまな拷問方法を紹介するスライドを見て学習していたという。

こうしたクラスでは拘束された政治犯を使った「実演」が行なわれ、１００人にも上る軍曹たちは残忍な拷問の様子を見ながら学習した。

報告書によれば、「この方法をブラジルに紹介した最初の人物の一人はアメリカ人警察官ダン・ミトリオーネである。

ブラジル軍事政権の初期、ブラジル南東部ベロオリゾンテの警察の指導にあたったミトリオーネは、街頭から物乞いを連れてきて拷問の実演を行ない、地元警察に肉体と精神の究極の矛盾状態を作り出す方法を教えた。

彼に指導を受けたかつての生徒の一人によれば、ミトリオーネはＣＩＡマニュアルの著者と同様、

効果的な拷問はサディズムではなく科学だと強調し、「的確な苦痛を、的確な量、的確な個所に」が彼のモットーだったという。

この章の訳注には、コスタ・ガブラス監督の傑作『戒厳令』（一九七二）は当時のチリを描いたものだがアメリカ人警察官ダン・ミトリオーネの拷問をモデルにしていると書いてありました。調べてみると、中古ＤＶＤで１万５０００円もするので、入手を諦めました。

コスタ・ガブラス監督の３部作は、『Ｚ』→『告白』→『戒厳令』と続けて制作されているようですが、そのどれもが中古品しか手に入りません。しかも値段も似たようなものなので、残念極まりないことです。

7

以上で見てきたとおり、ＣＩＡは南米で軍事独裁政権が跋扈（ばっこ）する土台をつくり、その悪評はアメリカの「チャーチ委員会」や南米各国の「真実和解委員会」の調査委員会によって世界中に知れわたることになりました。

そのことがＣＩＡの戦術転換を促すことになりました。そこでムジャヒディン（イスラム聖戦士）と呼ばれるイスラム原理主義集団を利用した政権転覆となりました。それが「さらに進歩した政権転覆工作」としての「カラー革命」の登場となるわけです。

が、それに移る前に、アメリカがチリで「９・11クーデター」を起こした一九七三年前後に、南米の軍事独裁政権はどのような状況になっていたのかを、もう一度、概観しておくことにします。

最近とみに権力寄りになっているウィキペディアですら、次のように「コンドル作戦」を説明し、「南米、軍事独裁政権の成立期間」と題するグラフまで載せているのですから（次頁を参照）、これは特筆するに値すると思ったからです。

チリのアウグスト・ピノチェト大統領の60歳の誕生日だった一九七五年一一月二五日に、国家情報局マヌエル・コントレラス長官は、南米の反共諸国の治安当局者を招いてコンドル計画を開始した。

コンドル作戦の主な参加メンバーは、チリ、アルゼンチン、ウルグアイ、パラグアイ、ボリビア、ブラジルであり、後にペルー、エクアドルの軍事政権も参加した。

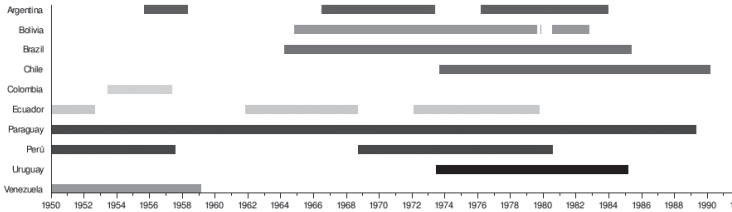
ＣＩＡだけでなく、イギリス、フランス、西ドイツの情報機関や、アメリカ国務長官ヘンリー・キッシンジャーやＣＩＡ長官だったジョージ・Ｈ・Ｗ・ブッシュもコンドル作戦に関与したとされる。（ちなみに、キッシンジャーは、ニクソン政権およびフォード政権で国家安全保障問題担当大統領補佐官や国務長官を務めた。）

コンドル作戦における具体的数が議論されている。しかし秘密作戦のため詳細は不明だが、５万人が殺され、３万人が失踪し、40万人が投獄されたとされる。

8

最近、キッシンジャーが１００歳で亡くなったことが話題を呼びましたが、右の説明を読むと、ノーベル平和賞を受賞した元国務長官キッシンジャーも、「コンドル作戦」に関与していたことが分かります。

南米「軍事独裁政権の成立期間」



「ノーベル平和賞」なるものがいかなるものかは、この一事だけでもよく分かるのではないでしょうか。

それはともかく、上に、「南米、軍事独裁政権の成立期間」と題されたグラフを紹介しておきます。これを見ると、「アメリカの裏庭」と称されてきた南米が、ＣＩＡの工作により、いかに「暗黒大陸」となってきたのかが、よく分かるはずです。

ちなみに横文字の国名にカタカナをふっておきます。上から順に、アルファベット順に並んでいます。Argentina（アルゼンチン）、Bolivia（ボリビア）、Brazil（ブラジル）、Chile（チリ）、Colombia（コロンビア）、Ecuador（エクアドル）、Paraguay（パラグアイ）、Peru（ペルー）、Uruguay（ウルグアイ）、Venezuela（ベネズエラ）

9

以上みてきたような経過でアメリカは、ＣＩＡを使った軍事クーデターではなく「民衆革命」を装ったクーデターへの作戦転換を図りました。

その主たる対象となったのが旧ソ連圏に属していた国々でした。グルジア（現ジョージア）の「バラ革命二〇〇三」、ウクライナの「オレンジ革命二〇〇四」、キルギスタンの「チューリップ革命二〇〇五」が、その顕著な例です。

また、その最も最近の例がウクライナの「尊厳の革命二〇一四」でした。

しかし、この「民衆革命」を装ったクーデターも、裏でアメリカが用意周到に準備して実行されたことは、その当時ウクライナに駐在していたアメリカ国務次官補ヌーランド女史が、「独立広場」で政府に抗議する民衆に「差し入れ」のドーナツなどを配ったりする行動にも如実に表れていました。

もしニューヨークやワシントンＤＣで展開された反政府活動、いわゆる「占拠運動 Occupy Movement」を、中国やロシアの大使が堂々と差し入れをしながら激励したとすれば、アメリカ政府がどんなに激怒するか、容易に想像がつくはずです。

しかも、ヌーランド女史は、「50億ドルの大金と30年の年月を費やした」とニューヨークで講演しているのです（拙著『ウクライナ問題の正体』第1巻18頁）。

また、いわゆる「ユーロ・マイダン（独立広場）」で１００人以上もの民衆を殺したのは政府側ではなく、反政府側の狙撃手だったことも、オタワ大学イワン・カチャノフスキー教授の研究で明らかになっています（前掲書、第1巻188–190頁）。

10

このように「カラー革命」は、グルジアの「バラ革命二〇〇三」から始まって、ウクライナの「オレンジ革命二〇〇四」およびキルギスタンの「チューリップ革命二〇〇五」に続いて、今度の「尊厳の革命」は、ウクライナでは2度目ということになります。

こうして、元ソ連外相だったシュワルナゼが大統領になっていたグルジア（現在はジョージア）の政権

を倒した「バラ革命二〇〇三」が、旧ソ連圏における「カラー革命」の始まりのように言われています。

が、実を言うと、このような「民衆革命」を装った政権転覆は、すでにユーゴスラビアのミロシェビッチ大統領を追い落としたとき（二〇〇〇）から始まっていたのでした。

これをアメリカがどのように裏で策動していたかを調べると、その後の動きが非常に理解しやすくなります。

ウクライナ紛争の起源を調べているうちに、私は最近になって、やっとこのことに気づきました。そこで項を改めて、以下に詳述したいと思います。

11

私がこのことに気づいたのは、ジョージア（旧名グルジア）で今年三月に「第2のカラー革命」の動きが出始めたからでした。

というのは、民衆革命を装った政権転覆の運動を担っているのが、ジョージアに送り込まれた様々なＮＧＯ（非政府組織）であり、この団体が「不安定化工作」の実働部隊になっていたからです。

このことに気づいたジョージア政府は、これらのＮＧＯの活動を規制するため、「海外からの収入が20％を超えるＮＧＯ」に「外国代理人」としての登録を義務付ける法律案を議会に提案しました。すると案の定、強い抗議運動が起きました。

この事件を取り上げて鋭く追求したのが、キット・クラレンバーグ（Kit Klarenberg）の次の論考でした。

＊CIA Front Threatens Color Revolution in Georgia
「ＣＩＡの別働隊がジョージアで色彩革命の脅威をつくりだしている」
http://tmmethod.blog.fc2.com/blog-entry-1370.html（『翻訳ＮＥＷＳ』2023-03-31）

この記事は次のように始まっていました。

二〇二三年三月の第２週、ジョージア（旧名グルジア）の首都トビリシで、数千人が街頭に繰り出した。そして「海外からの収入が20％を超えるＮＧＯに『外国代理人』としての登録を義務付ける法律案」に激しい憤りをぶつけた。

彼らは警察と激しく衝突し、あらゆる場所に反ロシアの落書きをした。また反乱的で好戦的なスローガンを唱え、ＥＵ、ジョージア、ウクライナの国旗をあたり構わず目立つように掲げた。

ＥＵとアメリカの当局者は、これらの広く報道された光景にぴったりするような、敵意あるコメントを絶え間なく流した。

まるでウクライナにおける二〇一四年クーデターの始まりを示すような出だしです。

国務省ネッド・プライス報道官も、アメリカ国際開発庁（ＵＳＡＩＤ）長官のサマンサ・パワー女史も、外国代理人法に賛成したジョージアの議員に対し、威嚇的にこう警告しました。

「ジョージア政府が期待しているＥＵ加盟が危うくなった場合、その責任をお前たちが負うことになるぞ」